

要旨

川口(1995)では、横浜国立大学留学生センター予備教育における中上級日本語学習者5名が作成した作文を使って、そこに見られる誤用を概観し、能力別による誤用の傾向を探ろうとした。本稿では、川口(1995)で扱い切れなかった誤用のうち、取り立て助詞と呼ばれる係助詞・副助詞とアスペクトの誤用について分析を試みた。その結果、「取り立て助詞」の「は・も・ばかり」は、取り立てるべき「自者」と「他者」を的確に把握できることがその正用の前提となること、アスペクトの中でも「～ていく」「～つつある」のアスペクト的意味の異同は非常に習得の困難なものであること、などの示唆が得られた。

[キーワード]

文法的な誤用、係助詞、副助詞、取り立て助詞、アスペクト

0. はじめに

川口(1995)では、横浜国立大学留学生センター予備教育における留学生の既習者5名を対象として、そのコースの過程において行った作文指導の中で学習者が作成した作文を使って、そこに見られる誤用を概観し、中上級日本語学習者が犯す誤用の傾向を探ろうとした。学習者の書いた作文から取り出した誤用のうち文法的な誤用と思われるものを分類した結果、助詞の誤用が全誤用の $\frac{1}{2}$ 以上(139^{註1)}例中55例)を占めることがわかった。さらに、その助詞の中でも格助詞の誤用が約半数(55例中26例)と最も多いことがわかったため、格助詞に関する全誤用例を取り上げ、その詳細について分析を試みた。

わずか5名の学習者の作文(各4点ずつ)ではあったが、上記の論文で触れることができたものは、結局、格助詞のみであった。学習者の誤用は、よく「宝の山」と言われるが、まさにその「宝の山」の一角に触れたという感を深くした次第である。

本稿では、川口(1995)では扱い切れなかった学習者の誤用の中から、特に誤用の目立ったものを取り上げ、分析を試みることにする。上級になってもなお残る誤用を分析し明らかにすることによって、学習者にとってもっとも習得

しにくい日本語の部分はどこなのか、把握することもできよう。この分析によって、日本語習得上困難な部分の解明の一端を、いささかでも幅広いものにできればと考える。

1. 学習者および資料の概要

対象とした中上級日本語学習者、および資料とした作文については、川口（1995）と同様のものである。

学習者は横浜国立大学留学生センターの予備教育（第4期1994.4月-9月）における留学生5名であり、その来日前の学習歴を以下に示す。

- ・学習者A…国籍：タイ、日本語学習歴：5年（大学）
- ・学習者B…国籍：韓国、日本語学習歴：1年（日本語学校）
- ・学習者C…国籍：韓国、日本語学習歴：4ヵ月（独習）
- ・学習者D…国籍：タイ、日本語学習歴：4.5年（大学）
- ・学習者E…国籍：ブラジル（日系）、日本語学習歴：2年（日本語学校）

日本語能力については、6ヵ月のコース終了時のテストからA（上級）>B・C（中上級）>D・E（中級）の三つのグループに位置づけることができる。

資料として使用したものは、コースの作文指導の中で書かせた400字程度の作文4点である。各作文は、使用テキスト『日本社会再考』（佐々木瑞枝、門倉正美共著、北星堂）において、それぞれ次のような指示のもとに書かれたものである。

1)第16課「食料は輸入に頼るのみ？」2)第19課「やっと週休二日制」

本文の内容を400字程度で要約しなさい。

3)第21課「人手不足倒産と外国人労働者」

本文を読んで、「外国人に対して将来、もっと門戸を開放すべきか、否か」について、400字程度で自分の意見を書きなさい。

4)第28課「粗大ゴミ」

タスク「手紙文を書く」にある韓国の友人から来た手紙を読んで、その返事を400字程度で書きなさい。

2. 文法的誤用の分析

川口(1995)では、上記のような指示のもとに書かれた作文20点の中から、誤用と思われるものすべてを取り出し分類を試みた結果、(1)「文法的な誤用」13

9例、(2)「語彙の使い方に関する誤用」50例、(3)「表記の誤用」28例、となつて、「文法的な誤用」が最も多いことがわかった。さらに、その「文法的な誤用」139例をその種類によって分類してみると、「助詞」の誤用が突出した数字を示しており(55例)、次に多いのがアスペクトである(15例)ことも得られた。本稿では、中上級になつても多く見られる誤用として、川口(1995)で分析の残つたもののうち助詞の係助詞・副助詞と、助詞に次いで誤用の目立つアスペクトについて、分析を試みることにする。

2-1. 助詞の誤用

<表1>

助詞の種類	例数
「は」と「が」	9
格助詞 「で」「に」「から」「へ」「の」「を」「と」	26
係助詞・副助詞 「は」「も」「など」「ばかり」	10
接続助詞 「て」「し」「～(な)て」「～(ない)で」「～ても」「～のに」「たら」「ば」「と」	10
合計	55

助詞の誤用は、全誤用の約¼(25.4%)を占め、日本語の中でも最も習得しにくいものであることがわかる。その誤用を助詞の種類によって分類したものが<表1>である。最も誤用の多い格助詞については、川口(1995)で取り上げたので、本節では残りの助詞のうち、係助詞・副助詞の誤用について分析を試みる。(「は」と「が」については、助詞の種類としてはそれぞれ係助詞と格助詞になるが、品詞の種類にとどまらない問題をもつと考えられるため、一目として別に取り上げた。)

2-2. 係助詞・副助詞の誤用

係助詞・副助詞に分けて誤用例を示し、一つ一つの誤用例について考察を加えていく(分析対象以外の誤用についてはここではふれない。学習者の例文中、 部分が誤用と思われるものであり、<>内の語はそうのように訂正できると考えられるものである。なお、例文はすべて学習者が書いた通りのものである)。

2-2-1. 係助詞「は」「も」の誤用

1. まず役所や銀行や郵便局などで実施されたし、一般の会社ではくも 徐々に根をおろしています。 [学習者B-週休二日制]
2. 労働時間が減っても仕事の量は変わらないわけで休みの時間に残業が多いこととか責任の重い立場の人たちにはもっと責任が重くなることがくも ありました。 [学習者B-週休二日制]
3. 土曜日を休むために平日は会社に遅くまで残業をする必要がある。その上に仕事がかたづかないときは休日出勤になることがくも ある。 [学習者E-週休二日制]
4. しかしこの問題は所によってくも 違いますか。子供の育て方も老人の取り扱いについて影響があるでしょう。 [学習者E-手紙]
5. 先の手紙はくも ありがとうございます。 [学習者C-手紙]
- 6.7. アメリカから輸入されている農産物、たとえば、オレンジ、牛肉、パイナップルなど、消費者にとってくも、安くておいしい食べ物が手に入るのはいいかもかもしれませんが、日本のしょうらいにとってくも しんばいなことです。 [学習者E-食料]

1 の場合は、文脈から主語は「週休二日制」ということがわかるのだが、そうすると「一般の会社では」の部分には、「(週休二日制は)まず役所や銀行や郵便局などで実施された」の「役所や銀行や郵便局など」に付加するものとして取り出されたことになる。「付加」という機能を与えるには「一般の会社では」ではなく「一般の会社でも」を使うべきであろう。2 は、「とか」を用いて「残業が多くなる(オオイ:学習者誤用、以下同様)こと」と「負担(セキニン)が重くなること」を「週休二日制」の弊害の例として取り出していると考えられる。従って「残業が多くなることとか…負担が重くなることも」とした方がよいだろう。3 は、文頭に接続詞「その上(ソノウエニ)」を使っていることから、前文の「会社で(二)遅くまで残業をする」の部分に「休日出勤になる」ことを加えたいのであれば、「休日出勤になることもある。」とすべきである。4 の「この問題」というのは、「退職した父親が粗大ゴミと呼ばれている」ことを指しているのだが、後に「子供の育て方も老人に対する態度(老人ノ取り扱い)に(ニツイテ)影響があるでしょう。」と続けていることから、「老人に対する態度は、住んでいる地域や子供の育て方などによっても異なってくる」という趣旨のものと考えられる。そうであれば「しかしこの問題

は地域（トコロ）によっても違うのではないのでしょうか（違イマセンカ）。」
のように、「も」を加えたほうがよいと思う。

5の「は」は、文頭の「先の」とともに削除すべきものとする。相手が手紙をくれたことに感謝する言い方として、日本語では「お手紙ありがとうございます／ました」のように「ありがとう」の前には助詞を入れないのが普通ではないだろうか。6.7は「消費者にとって」と「日本のしょうらいにとって」を対比させようとしており、そのためには「は」を加えなくてはならない部分である。

このように見てくると、これらの「も」「は」（5を除く）は、取り立てられる部分とその背後にある部分との関係が適切に捉えられて、初めて正用となる用法であると言える。これらの「も」「は」は、「取り立て助詞」と呼ばれ、沼田(1986)の定義に「とりたて詞とは、文中のさまざまな要素－これを自者と呼ぶことにする－をとりたて、これに対する他者と呼ぶことにする－との論理的关系を示す語である。」(P108)とあるのを借りれば、取り立てるべき「自者」とこれに対する「他者」の関係を論理的に示す機能をもつ助詞である。従って、その「自者」と「他者」の関係を的確に捉えることがその使用の前提となっていると見え、これらの助詞を正しく用いるためには、まずその二者の関係に注目させることが肝要であろう。

2-2-2. 副助詞「など」「ばかり」の誤用

8. 日本の食糧自給率をほかの先進諸国と比較して見ると、アメリカ<u>など>があり余るほどの食料を産出するなど<の>に対して、日本は50%しか自給できないということがわかります。 [学習者C-食料]
9. しかし、今の農村の生活は都会と同じだが収入が一定していない、都市の文化に接することができない<u>など>のマイナス要因も多い。 [学習者D-食料]
10. 定年退職して、毎日家にいるばかり<だ>の方もいますが、外でいろいろなこと学んだり、書読をしたりしています。 [学習者D-手紙]

8は「ほかの先進諸国」の一つとして「アメリカ」を取り出しているのだから、「など」は「アメリカなど」のように「アメリカ」の後に置くべきである。また、9は格助詞「の」への接続法の誤用である。文脈から言えば、「収入が一定していない」「都市の文化に接することができない」ということを「農村

の生活」の「マイナス要因」の一例として列挙しており、「など」が必要なが
ことがわかる。また、接続法の上からも、「など」を入れて前の部分を名詞化す
れば正用となる部分である。

これらの「など」は、取り立て助詞の範疇からははずされている「など」の
用法で、寺村(1991)では「『その類のもの』を表す接尾辞」と呼ばれ、「同類
のものを束ねる客観的な意味」をもつとされている。この「など」の用法を正
用に導くには、まず「その類」「同類」がどの部分であるのかを明らかにさせ
ねばならないだろう。

10は、「ばかり」ではなく「だけ」を使って「毎日家にいる(イテイル) だ
けの方もいますが、外でいろいろなことを学んだり、読書(書読)をしたりし
ている方もいます(シテイマス)。」とした方が落ち着くのではないか。「X
ばかり」と「Xだけ」の違いは、寺村(1991)では「『(X)ばかり』は、X以
外のものを明示的に排除する点で『だけ』『シカ』と共通するが、その中心的
な意味の一つとして、<すべて>または、<いつも>というニュアンスを含ん
でいる点が異なる」(P177)と考えている。10では「ばかり」を使って、「他者」
として「外でいろいろなことを学ぶ」ことだけでなく「読書をする」ことも取
り立てているため、「自者」として取り立てたものは「家にいる」ではなく「
いる」だけであることがわかる(「他者」の「読書をする」ことは家において
できることなので)。そうすると「家にくいる>ばかりの方」「家にくいる>だ
けの方」の違いは、寺村(1991)の分析に従えば、前者が「いつもいる」という
ニュアンスが強いのにに対して、後者は「ただいるだけで何もしない」と言う意
味合いをもつことにあると考えられる^(注2)。10の趣旨は後者の意味をもって
おり、「家にいるだけの方」を使ったほうがよいのではないか。以上の分析から、
限定の意味の取り立て助詞「ばかり」と「だけ」の微妙な違いは、学習者にとっ
て習得の難しいものであることが窺い知れよう。

2-3. アスペクト

次に、助詞に次いで誤用の多かったアスペクト(15例)について、その種類
によって誤用例を分類し、考察を加えることにする。

2-3-1. 「～ている」の誤用

11. 日本の食糧自給率をほかの先進諸国と比較して見ると、アメリカがあり余

- るほどの食料を産出するくひなどに対して、日本は50%しか自給できないということがわかります。 [学習者C-食料]
12. 定年退職して、毎日家にいるばかりの方もいますが、外でいろいろなこと学んだり、書読をしたりしています。 [学習者D-手紙]
13. まず役所や銀行や郵便局などで実施されたし、一般の会社では徐々に根をおろしていますくつある。 [学習者B-週休二日制]
14. 今は年代によって違う解釈を持っていますが、とにかく「週休二日制」は日本の社会の中で浸透しているくつあるのは確実です。 [学習者C-週休二日制]
15. しかし、外国からの農産物を輸入しているくひ一方だったら、日本の自給率の低下が進んでしまう。 [学習者A-食料]
16. 公的部門とか銀行や郵便局などの金融機関、一部の高校も土曜日を休みにするところが出てきますくひ。 [学習者C-週休二日制]
17. それは私たちが思わず生活したくひのもう一度考えるようにするいい機会になりました。 [学習者C-手紙]

11~14 は、動詞の性格によって「～ている」を取るものと取らないものがあり、取る場合はどのような意味になるのか、代表的アスペクト「～ている」の使用法の基本となるべきことが習得されていないために起こった誤用と思われるものである。11の動詞「産出する」は、「～ている」をつけなければ動作や現象が継続していることを表すことはできず、反対に12の「いる」は、もともとが状態を表す動詞で、「～ている」の形にはならないものである。13は、「根を下ろす」という動詞に「ている」をつけると、「ある過去（以前）の出来事が終わって、その結果がいまある状態として残っているのを表す」（寺村1984:P125）ことになるが、ここは、まだその動作・作用は完了していないため、「つつある」を使うべきであろう。14の場合も、現在はまだ「週休二日制」が「日本の社会に（デ）浸透している」状態にはなっておらず、「浸透しつつある」状態であると言える。

以上の分析から、各動詞の性質が習得されて初めて、アスペクト「～ている」の使用は正用となることがわかる。

それに対して15は、動詞「輸入する」に「～ている」をつけて継続中の動作を表し「外国から（ノ）農産物を輸入している」までは問題はないが、「一方

だったら」に続けるとどこか変である。これは、「もっばらその方向だけ」という意味の「一方」という名詞による制約ではないかと考えられる。

- a. 人口は増える一方だ。 b. 事態は悪化する一方だ。

?人口は増えている一方だ。 ?事態は悪化している一方だ。

a. b. の例をみても、「一つの方向」を表すものとして、「一方」のまえには動詞の辞書形が来るのが普通であることがわかる。従って、15の誤用はアスペクトというよりも「一方」という語の使用法に関するものと言えるようだ。

16の「出てきます」は、「Vてくる」だけでは「Vの表す現象が、物理的・心理的に、自分に向かって次第に接近する」（寺村1984:P160-P161）ことしか表していないので、現在そのような状態にあるということを述べるためには「出てきています」と、さらに「～ている」をつける必要があるだろう。

17の「～した」と「～していた」の使い分けは、寺村(1984)に「多くの外国人にとって、意外に難しい点の一つ」(P144)と指摘があるが、ここでは「生活する」という、時間的な幅をもつ動作を表す動詞の性質から、単に「生活した」と過去のテンスを加えるのではなく、「生活していた」のように「～テイル」というアスペクト表現を使ってその動作の継続を示すべきであろう。

2-3-2. 「～ていく」「～つつある」の誤用

18. 週休二日制は日本にとって、まだ新しいものだが、この制度は除々に日本の社会全体に根をおろしていくつつある。 [学習者A-週休二日制]
19. 今後も必ず普及しつつあるていくに違ひ。 [学習者A-週休二日制]
20. 日本では、今、家庭内だけじゃなく、一般社会のどこでも老人に対する尊重を失っていっています知つた。 [学習者A-手紙]
21. また、輸出と輸入のバランスをとるために農産物を輸入しなければならない状況もだんだん食糧自給率を低下させるていく原因になります。 [学習者C-食料]

18. 19. 20は「～ていく」と「～つつある」の問題である。どちらも現在進行中の動作・現象を表しているという点では共通しているが、そこには微妙な違いがある。下の例をみていただきたい。

- c ローソクの火が消えていく。 c' *今、ローソクの火が消えていく。
- d ローソクの火が消えつつある。 d' 今、ローソクの火が消えつつある。

c. d. では「ていく」と「つつある」の交替は可能であるが、「今」を加えたc' d'をみると、「今」と「ていく」は共起しないことがわかる。「～ていく」は、「『XがV』という現象が、自分（話し手）から次第に遠ざかる」（寺村1984:P163）という、進行の方向を示しているのに対して、「～つつある」の中心となる機能は、その動作・現象が現在も継続しているという現在の状態を表すことにあると思われる。従って、d'は言えてもc'は言えないのではないか。

このように考えると、18の場合、「根を下ろしてていく」としてその進行に方向性を持たせ、未来の事象に言及するのであれば「～ていくだろう」のように推量表現をつけるべきだし、また「根を下ろそうとしている」現在の状態を述べるのであれば、「根を下ろしつつある」とするべきであろう。19は、「今後も」とあることから「普及する」を未来への方向性をもつ事象と捉えていることが明らかなので、「普及してていく（に違いない）」とすべき部分である。

20は「失っていく＋ている」として、「老人に対する尊敬の念（ソynchou）を失う」という現象が、現在、未来へ向かって進行中の状態にあることを述べたい意が汲み取れる。「失いつつある」とすればその意は十分伝わるであろう。

18. 19. 20がいずれも、最も日本語能力の高い上級学習者Aの誤用であることから、「～ていく」「～つつある」の表すアスペクト的意味の異同は、日本語の中でも非常に習得の困難なものの一つと言えるだろう。

21は、誤用と言えるかどうかは別として、副詞「だんだん」を使用したのであれば、それが修飾する動詞には「～ていく」というアスペクトを加えた方がよいのではないかと考える。「だんだん～ていく」という形で定着させるとよいと思う。

2-3-3. 「てくる」の誤用

22. 労働時間が減っても仕事の量は変わらないわけで休みの時間に残業が多いこととか責任の重い立場の人たちにはもっと責任が重くなることがありました（出てきた）。 [学習者B－週休二日制]
23. いままで家族や社会のためにいっしょうけんめい働いた（働いてた）人がいまから働けないようになったとしてゴミあつかいをすることはしょうらい老人になる私を考えると、こわがります。 [学習者B－手紙]
24. いままで家族のために自分の人生を犠牲したてた（てた）父親に対して、新たに感謝します。 [学習者C－手紙]

これらはいずれも、「Vの表す現象が、物理的・心理的に、自分に向かって次第に接近する」ことを表す「～てくる」というアスペクトに、過去のテンス「た」を加えて「～てきた」とするべき部分である。

22は、「ありました」に「～てきた」を加えることはできないが、ここで述べている現象は過去のことでなく現在に至る状況であるから、「負担（セキニン）が重くなる」という事態が起こり、それが現在も続いているということを表すためには、「出てきた」とすればよいだろう。

23.24 は、「いままで」という副詞を使っているので、過去から現在へ至る継続中の状態を表現する場合「今まで～てきた」にした方がよいと思う。21の「だんだん～ていく」の場合からも言えることだが、このように、あるアスペクト表現と相性のいい副詞をいっしょに与えることは、アスペクトの定着を図り、誤用を避ける一つの方法となるかもしれない。

2-3-4 「～つづける」の誤用

25. このまま、農業に従事する若者が減り続ければ、日本の食糧自給率は上がる（下り続ける）と思う。 [学習者D-食料]

25は、文脈から「農業に従事する若者が減って日本の食糧自給率は下がった」という現在に至る状況がわかる。従って、「このまま、農業に従事する若者が減り続ければ、日本の自給率は下がり（上がり）続けると思う」のように、寺村(1984)の言うところの三次的アスペクト「～つづける」を「下がる（上ガル）」にもつけるべきであろう。

3. 結論

本稿では中上級日本語学習者の作文における誤用のうち、係・副助詞とアスペクトの誤用について考察した結果、次のような示唆を得ることができた。

1. 係・副助詞のうち「取り立て助詞」の「は・も・ばかり」は、取り立てるべき「自者」と「他者」を的確に把握できることがその正用の前提となる。
2. 代表的アスペクト形式とも言える「～ている」の誤用の原因は、それぞれの動詞の性質が習得されていないことによる。
3. 「～ていく」「～つつある」については、上級者においても誤用が多く見られたことから、この二つのアスペクト的意味の異同は日本語の中でも非

常に習得の困難なものの一つと言える。

- 4 「～ていく」「～てくる」は、「だんだん～ていく」「今まで～てきた」のように、相性のいい副詞をともに与えることが定着を図る手立てとなる。

以上、二論文をもってしても触れることのできなかつた誤用や母語の干渉など、分析上残された問題は多々あるが、中上級日本語学習者の誤用の一例から得られた日本語習得上の問題点、またその指導法の一つを指摘することはできたかと思う。

注

- 1)以下の数字に、川口(1995)で示されたものと若干異なるものがあるのは、前回見落としたものであり、今回新たに誤用として付け加えたことによる。
- 2)森田(1989)が、「だけ」には「“それ以上は違うが”と否定する意識がある」(P632)のに対して「『ばかり』は『だけ』と違って“まさにその対象そのもの”という強調意識を基本にしている。」(P935)と述べているのも、本旨を支持する記述と考える。

参考文献

- 1)市川保子(1993)「中級レベル学習者の誤用とその分析」『日本語教育』81号
- 2)奥津敬一郎・沼田善子・杉本武(1986)『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 3)川口良(1995)「予備教育中上級日本語学習者の作文にみる誤用」横浜国立大学留学生センター紀要第2号、P30-P43
- 4)小矢野哲夫(1982)「国語学におけるテンス・アスペクトの変遷」『日本語学』12月号
- 5)田窪行則(1987)「誤用分析1-7」『日本語学』Vol. 6. 4月号-10月号、明治書院
- 6)寺村秀夫(1984・1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ・Ⅲ』くろしお出版
- 7)長友和彦(1992)「日本語の誤用分析」『日本語教育学』奥田邦夫編、
- 8)水谷信子(1984)「誤用分析1-6」『日本語学』Vol. 2. 6月号-11月号、明治書院
- 9)水谷信子(1994)『実例で学ぶ誤用分析の方法』アルク
- 10)水谷信子(1985)『日英比較話しことばの文法』くろしお出版
- 11)宮田幸一(1980)「格助詞と取り立て助詞」『言語』vol. 9-12
- 12)森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店

(お茶の水女子大学日本語文化専攻助手)